

人のとなりに

小原 麻貴さん



「人のとなりに」とは…
文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人となり」をイメージしたコーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

人生の転機

生まれも育ちも東郷地域で、現在は、多くの市民が利用する「肥薩おれんじ鉄道(株)」で、信号通信担当として働く小原麻貴さん。

「8年前の子どもの誕生をきっかけに肥薩おれんじ鉄道に入社した。子どもと過ごす時間を大切にしたいだったので、人生を考え直す良いタイミングになった。また、何かに没頭する仕事があった」と言います。

信号通信に関して、どのような仕事をしているのか伺うと、「信号機や踏切、転てつ機(列車の通り道を切り替える装置)などの修理を行い、肥薩おれんじ鉄道が管轄する設備の管理を行っている」と教えてくれました。

人の命を守る「使命感」

地域住民の安全を裏で支える仕事。「電気設備に障害が起きたときには、昼夜問わず現場に向かい、障害を解決しなければならぬ」と言います。簡単に解決できない問題に向き合うときもあるそうで、作業する際には、原因を定めつけないということに気を付けているようです。

「解決パターンをいくつも考え、仲間と協力して解決できたときにやりがいを感じる。人の命を守るという『使命感』を持つ

これからの列車利用

少子高齢化が進み、人口減少が問題となっている今、利用者も年々減少傾向になっていて、現在は、学生の利用が主になっています。

「通勤や通学以外で、おれんじ鉄道を利用してもらえるようにもっと盛り上げていきたい」と言います。また、「おれんじ食堂サンセットと薩摩川内市バスツアー」と題して、ミニツアーを開催しました。このような形で地域の皆さんに楽しんでもらえるように、もっとおれんじ鉄道全体も盛り上げていきたい」と意気込みを話してくれました。

20周年を迎える

「これまでと変わらず、安全安心を維持することはもちろん、新しいやり方で、責任感を持ち、自分たちがおれんじ鉄道を引っ張っていきけるように頑張りたい」と話す小原さん。

「ソーシャルメディアをさらに活用して、若者世代へおれんじ鉄道の魅力を伝え、この会社で働いてみたいと思ってもらいたい」。まずは、知ってもらいたいことから始めていきたいそうです。

また、「今の職場では、薩摩川



▲上川内駅の駅名標の前で

内市在住の社員は自分一人なので、薩摩川内市に住む同僚も増やしていきたい」と、これからの目標も話してくれました。

お子さんと過ごす休日

休日は、お子さんとの時間を過ごす小原さん。

「小学2年生の長男は、自分が中学時代にしていたバスケットボールをしていて、一緒に練習するなど、子どもと過ごす時間を大切にしたい」という夢が叶って嬉しい。また、一緒に練習していると、子どもの成長を感じることができて嬉しい」と笑顔で話してくれました。

小原さんは、先輩や同僚たちと助け合いながら、これからも利用者へ安全安心を届けます。

深発見 歴史文化遺産

第拾玖回 田の神さあ

傍らでそつと微笑む守り神

田んぼの脇や公園、公民館など、私たちの身近な場所に、何ともユーモラスな表情で微笑む「田の神さあ」。

田んぼを守り、豊穰や子孫繁栄をもたらす神として大切に祀られています。

田の神信仰は全国的に見られますが、石像など偶像化しているのは、鹿児島県と宮崎県の一部(江戸時代の旧薩摩藩領)のみです。

本市でも数多くの田の神さあが造られ、確認されているものだけでも400体程存在すると思われまます。

そんな中から、特徴的な「推し田の神さあ」を紙面の限りご紹介しします。

自然石文字彫



- 高江町宝満神社付近 天明7年(1787)
- 「御田神」の銘あり

単体浮彫(線刻)



- 楠元町楠元下公民館付近 寛延元年(1860)
- 高さ約2メートル



踊る田の神



「田の神戻し」
田の神さあのお引越しを神の化身が行う。
■ 祁答院地域で毎年4月10日実施

薩摩川内には長い歴史の中で起きた物語、育まれた文化が数多くあります。このコーナーでは、数ある薩摩川内の歴史・文化の中から、とっておきのトピックをご紹介します。

【参考文献】「川内の田の神」

双体丸彫



- 網津町井上 開聞神社付近 天保11年(1840)

磨崖型双体浮彫



- 寄田町山之口 年代不明
- ※磨崖型の田の神は県内でも数少なく、大変珍しいタイプです。

双体浮彫



- 東郷町鳥丸 田の神ロード 平成10年(1998)
- 陽成町宮小平 宮田橋付近 天保12年(1841)

宮崎町宮崎

本市やいちき串木野市に多く見られ、「アベック田の神」とも呼ばれます。

■ 宮崎町宮崎 春日神社内
※春日神社には工事による移設や家庭にあった「持ち回り田の神」など12体が持ち寄られています。



▲令和4年6月号通常版の広報薩摩川内にて掲載しておりますので、ご覧ください。